

絵画表現による自己の再確認

—子ども基礎演習「私の原風景」「自画像」を通して—

武田 雅行

A Study on Self-Reaffirmation by means of Drawing Expressions: Through Analysing the Curriculum Subjects "My Original Scenery" and "Self-Portrait"

Masayuki TAKEDA

1. はじめに

本学の子ども教育学科は、「芸術を基盤とする教育」を通して感性豊かな教育者、保育者の養成を目指すということを教育理念の一つとして掲げ、平成19年に開学した。本学の特色でもある「子ども学」の基礎として、将来、子どもたちの前に立つことをイメージして入学してきた学生に対し、「子ども基礎演習」（必修2単位）を1年次に設定し行っている。学生にとっては1年間で、4人の教員による特色ある4つの講座をそれぞれ受けることになるが、唯一美術的見地での切り口で行なうこの講座では、二つの課題を演習として行っている。

最初の課題として、「私の原風景」と題して、子ども時代の記憶を絵で表現するという内容で実施しており、意図的に子供時代の記憶を蘇らせる装置としての絵を描かせるものである。また、二つ目の課題は、視覚的に自分を見つめ直す「自画像」で、対極的な二つの感情による表情を一つの顔として色と形で表現しようとするものである。

提出されたこれらの作品を写真に収め、「私の原風景」では、その絵にまつわる本人のメッセージを付けまとめたデータを、開学以来5年間に渡り収集整理してきた。5年目を区切りとして、学生たちが記憶を振り絞り、絵画に込めて表現した作品を通して、教育者、保育者を目指す学生の気質や傾向等を分析すると同時に、この授業の意義を再確認してみたいと思う。

2. 子ども基礎演習 課題I「私の原風景」

1) 原風景について

誰もが子供時代を通過してきている訳であるが、いつしか大人になり、子ども時代にどんな気持ちで生活していたかを忘れてしまっている自分に気付く。どんな感覚で、嬉しいこと、楽しいことを感じ、思っていたのだろうか。悲しいこと、辛いこと、腹の立った時、どのような気持ちでいたのだろうか。大人になって大人としての目線で見ると、子どものとる行動や気持ちが十分に理解できていないことも多い。とるに足らない些細なことであっても、子どもにとってはすごく大きな出来事であったりする。そのことがすごく嬉しかったり、待ち遠しかったり、また、ひどく悲しかったり、腹が立ったりと、そこには、大人には理解できない、子どもならではの世界が存在する。

将来、子どもたちの前に立つことを目指す本学の学生にとっては、子どもの立場に立って、子どもの目線で話をしたり思いを寄せることも重要である。いつでも子どもの頃の気持ちを思い起こすことが出来れば、そのような対応も可能になるのであろうが、大人になり更に歳を重ねるにつれ、それが段々と難しくなっていくのも事実である。

人間は、どこまで記憶を遡れるのであろうか。小学校、幼稚園、入園前までは何とか記憶を辿れるかもしれないが、更に、3歳、2歳、1歳となると果たしてどれだけの人に記憶が残っているだろうか。よほど印象に残る出来事や事件でもあれば、断片的なものとして残っていることもあるが、遠い幼い頃の記憶を辿れば辿るほどそれは曖昧になり、霧の中に薄っすらと感じられる程度のものでしかなくなってしまふ。しかし、全てを忘れてしまったような遥かに遠い昔のことでも、実際に当時の場所を訪れたり、何かしら記憶に残るほんの小さな思い出の品や写真などの手掛かりがあると、それが引きがねとなって、僅かでも、その時あるいはその周辺の記憶が蘇るという経験は誰にもあるのではないだろうか。たとえ、それが形のない匂いや音、肌をかすめる風や食べ物の味覚だったとしても、記憶を呼び覚ますには十分なきっかけとなる場合がある。

たとえば、「日本の原風景」といえば、のどかな田園風景、茅葺屋根の民家や棚田の農村風景、あるいは、桜花爛漫の山河や、白砂青松の海岸の風景などが思い起こされる。ここで云う原風景とは、その人の中にある「心の原風景」のことであり、写真のような現実を切り取ったものとは意味が異なる。また、「心的イメージ」あるいは「心象風景」という言葉もあるが、「原風景」となると少し意味合いが違って来る。前者はあくまで架空の風景、想像上の風景であるのに対し、「原風景」は心象風景の中で最も根源的というか、幼少期の記憶として深く残った現実の情景のようなものを指していると言えよう。

誰でもという訳ではないかもしれないが、人がある程度の年齢になった時までも、記憶の中にくっきりと覚えている風景や光景がある。それが、その人にとっての原風景であるといえる。普段は全く忘れていても、頭の隅っこに眠っていて、ひょんな時にふっと意識の端に上ってきて自分というものを再認識させられてしまう。歳を重ね、様々な人生経験を積んできた者が過去を振り返った時、あれが正しく私の原風景だと気付く、あるいはそのように感じることもあるかもしれない。しかし、高校を卒業したばかりの若い学生にとって、これが私の原風景だと言いきれる者がどれだけいるだろうか。おそらく、ほとんどいないというのが現実であろう。年輩者であれば、戦争を体験し、戦後の混乱期から高度経済成長期、バブル全盛期とその崩壊を経験したり、または、人によって地震や台風などの天災や不運な事故に巻き込まれたり、多かれ少なかれ、誰もが様々な事件や出来事に遭遇した人も多いことだろう。また、進学、就職、結婚、子育て、介護、肉親との別れなど数え上げたら限りがない。しかし、今の若い学生たちは、人によって様々ではあるが、多少の事件や出来事があつたにせよ、大半はこの平和な日本にあって、親の庇護の元、小学校・中学校・高等学校と、それも、ゆとり教育にどっぷりとつかってきた世代の若者たちであり、はたしてここでいう「原風景」なるものを見つけることができるのか、誰もがこの課題を前にして躊躇してしまうのも無理はない。

将来、「子どもたちの前に立つ」ことを目標として本学に入学してきた学生には、今一度、原点に立ち返り、子ども時代の自分を振り返って自分を見つめ直すきっかけとなるものを与えたい

と考えた。「子ども」のことをよく理解し関わるために、まず、自分の子ども時代の頃の気持ちを思い起こしてみることが、自己（原点）を知るよいきっかけになるはずである。

「原風景」は、とても懐かしい記憶であるとともに、必ずしも本人にとって大切にしたいというイメージばかりではない。時にそれが、思い出したくもない辛く悲しい風景であることもあるだろう。しかし、それがあから、今、こうして頑張っていける、あるいは、こんな仕事に就いていると考えることもできる。

自分の人生に少なからず影響を及ぼしていくであろう自分自身の「原風景」を見つめ直し、そのイメージを絵で表すことで自己の再認識を試みようという試みが、この授業の目的である。この「原風景」をどう捉えてよいのかが学生にとってはなかなか難しい問題であるが、まず、ここでいう「原風景」の意味をしっかりと理解し、自分にとっての「原風景」がどんなものであるか、記憶を辿りながらイメージするところから始まる。

仮に頭の中に大体のイメージが湧いたとしても、それを画用紙の上にどう表現してよいのかが分からず、大半の者の手がそこで止まってしまう。一人ひとりの学生の頭の中には、それぞれのイメージが固まってきてはいるものの、それを絵画（色と形）として表現する技術が伴わないのであるからなおさらである。将来、画家やアーティストを目指すわけでもなければ、絵画表現の基礎的な技術を学んでいる訳でもない。ましてや、目の前に描く対象が存在するわけでもなく、頭の中におぼろげに広がっているイメージを形にしていくことなど至難の業である。うまく表現することができないのも当然であるし、手を動かすことに躊躇してしまうことも十分に理解できる。

この授業の最初の導入部分で、学生たちに必ず聞いていることがある。絵を描いたり、ものを作ったりすることが好きだという人がどのくらいいるかを聞いてみる。15名程度のグループの中で一人か二人が申し訳なさそうに手を挙げる。更に、絵を描いたり物を作ったりすることが苦手と感じている人、または嫌いだという人となると、7～8割の学生がそれに該当する。長い間、美術を専門とし関わってきた自分にとっては愕然とする結果を、毎年目の当たりにするのである。中には、絵が下手だと思ひ込んで、描くことに対し強いコンプレックスを感じている学生も多い。そこで、授業を展開するにあたり、先ず、高い関を取り払って気持ちの負担を軽減させるアドバイスが必要となる。

上手に描こうとする必要がないこと。発表するわけではないので人の目を気にする必要がないこと。作品の出来栄を評価の対象にしないこと。従って、絵を描くことに対し構える必要のないことをよく伝え、気持ちの上でのハードルを低くすることに努めている。

ここで描く絵は、一人ひとりの個人的な風景であるため、人に説明する必要もなければ理解される必要もない。また、批評や評価をされることもない。この絵が、あくまでも自分の子どもの頃の気持ちに戻るための、きっかけとなってくればそれでよいのである。言うなれば、大人になって忘れかけた『子どもの頃の気持ちに戻るための装置』と考えればよい。出来上がった絵が、仮に稚拙なものであったとしても、それを描く時のその人の頭の中には、その時の記憶（原風景）が鮮やかに蘇っていることは間違いない。極端な言い方をすれば、画面に現れたものが仮に象徴的な一本の線や、記号的なものであったとしても、その時その頭に浮かんだ風景や思い出を蘇らせるのに十分なきっかけを与えてくれる 入口（装置）となるのである。

つまり絵の表現自体は、ここではあまり重要ではない。上手いか下手か、構図がどうであるとか、綺麗か汚いかなどは全く関係ない。ただ描く時にどれだけ真剣に過去と向き合い、記憶をたどり、更にその周辺部分の記憶を広げることができたかが大切なのである。これから何年も時間が経過した段階でその絵を目にした時、それがどんな絵であれ、その絵を描いていた時の記憶とともに、一気に子ども時代の気持ちにワープすることができるはずである。

2) 授業の展開とプロセス

特に「原風景」と呼べるものが見つからない場合は、幼い頃の印象深い思い出や出来事の一場面等を絵にしても構わないということにして、考え過ぎて先へ進めなくならないように伝える。その風景が、山だったり、海だったり、街中だったり、人によって様々だが、その映像がいつまでも記憶に残り続けているものであるならば何でも構わないということにしている。学生には、制作の手順を以下のように示したプリントを配布し演習に入る。

- ① まず、「原風景」の意味を資料を基にしっかり理解する。
- ② 自分にとっての「原風景」はどんなものかイメージしてみる。
- ③ 絵に登場させたい様々な要素をフレーズで列挙してみる。
- ④ いたずら描きのような感じで、絵のイメージを形にしてみる。(エスキース)
- ⑤ エスキースを基に、下書きを描く。
- ⑥ 水彩絵の具、色鉛筆等を使用し、着彩する。
- ⑦ 完成品に簡単なコメントをつけて提出。(メールで提出：100字程度)

※人に見せるための作品を描く訳ではない。自分の「原風景」を再確認するための作業である。

3) 記憶について

当然のことながら、人間は一人ひとり違う環境の中で育つ。そして、その中で、個々の人格が形成されていく。家族構成も違えば、その背景にある育った地域の文化や風習も異なるだろう。提出された作品は、どれも大変個性に富んでおり、添付されたメッセージとともに見ると、漠然とではあるが、その人のその時の気持ちというものが伝わってきて、若いながらも何らかの「原風景」らしきものを皆が持っているということが確認できる。

学生達の選んだ記憶の時期は様々である。大半が幼児期、小学校低学年の頃の思い出を描いているが、遠い記憶としては3歳ぐらいから、近いものでは高校生時代を選んだ者もある。記憶というものは不思議なもので、時系列的に今に近い記憶が鮮明で、昔のことが朧気であるということは必ずしも云えない。遠い存在であるはずの子供時代の自分が、実際には距離感のない近しさを感じる存在となる場合も多い。

人間の記憶は、脳の海馬というところに蓄積されるらしいが、人は通常、3歳以前の経験を思い出すことができない。海馬を中心とする記憶回路の成熟より先に経験するため、それ以前に経験したイメージとしての記憶は残りにくいといわれている。学生達の「原風景」作品を見ても最も遠い記憶はこのあたりが限界のようである。しかし、脳の発達に関しても個人差はあろうし、

とても強い衝撃的な体験であればしっかり記憶されることもある。感情的な記憶はこれと独立して、それとは認識しなくても潜在的な記憶として残る。鮮明な映像としての記憶としては残らない3年間ではあるが、「三つ子の魂百まで」と言われるように、この時期をどのように過ごしたかということが、将来の人格形成において大きな意味をもつことは言うまでもない。

4) 分析

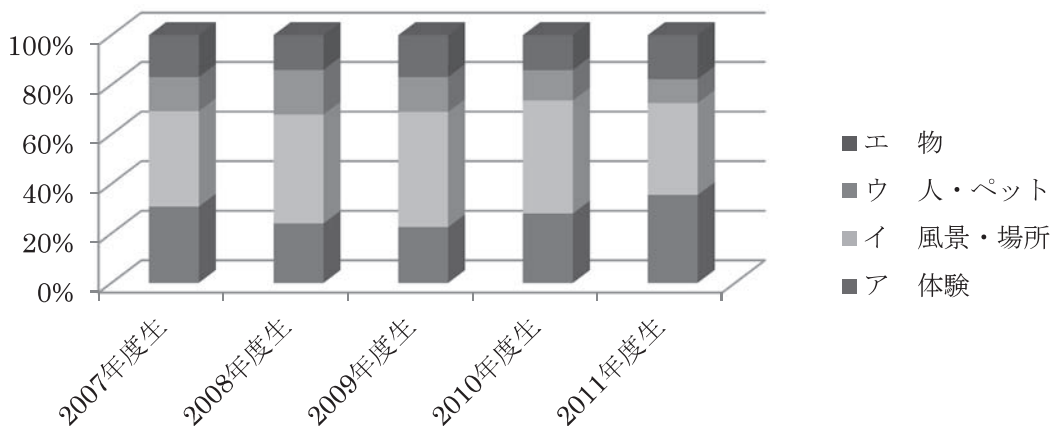
前述したように、本学に在学した学生全員の305名について、それらの作品をいくつかのパターンに分類して分析を行った。入学年度が違って、選んだ内容や気持ち的な面での捉え方については、ほぼ同様の傾向が見て取れる。(グラフ1・2) それぞれの分類に沿って、幾つかの作品例を作者のコメント(原文のまま)とともに掲載している。

(1) 原風景の内容について、題材・テーマについて

- ア 体験(行事・スポーツ・旅行・遊び・出会い・別れ・楽器の習得・自転車 etc)
- イ 風景・場所(海・山・空・川・季節・自然・景色・道・特定の場所 etc)
- ウ 人・ペット(家族・友人・恩師・犬・猫 etc)
- エ 物(持ち物・家具・宝物・動物・植物 etc)

表1 原風景の内容

	ア	イ	ウ	エ
2007年度生(65名)	20	25	9	11
2008年度生(50名)	12	22	9	7
2009年度生(71名)	16	33	10	12
2010年度生(57名)	16	26	7	8
2011年度生(62名)	22	23	6	11
合計(305名)	86	129	41	49



グラフ1 原風景の内容別の年度別割合

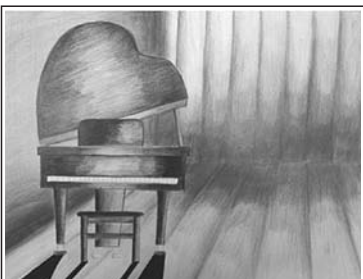
(イ) 原風景の内容としては、懐かしい風景、大好きな風景、気になる風景、あるいは印象深い出来事のあった特定の場所(42%)などが最も多かった。文字通り「原風景」ということで風景そのものをイメージした者が多かったからではないだろうか。

作品例 1. (イ) 風景・場所

	<p>泣き虫だった私は、学校から帰ると庭の紅葉の木に登り、山のむこうに向かって泣いていて、そのたびにおばあちゃんが私のために家へ帰ってくれていました。この絵はその木に登って泣いたとき見えた景色です。おばあちゃんのことを思い出し、温かい気持ちになることができました。</p>
	<p>この絵は、私が転校したときに光市でみた最後の海です。私は小学校2年生のときに光市から山口市に転校しました。光市の家は、海が近く、毎日母と海辺に散歩していました。最後に光市を出るとき、夕方に母と見に行った海に沈む寸前の夕日が今でも忘れられません。</p>
	<p>私の原風景は田植えをし終わった田んぼの風景です。その風景を見ると色々なことが思い出されます。刈られた草を手で集めたことや弟と一緒に集めた草を田んぼに投げたこと、田植えを手伝った時の泥の感触や風景、田んぼの匂いが思い出されます。</p>
	<p>弟と一緒に赤とんぼを捕まえにいった場面が私の原風景です。弟はまだ新しい虫とり網と虫かごを持って行き、私は何も持たずに先を行っていました。黄金に輝く稲の上を飛ぶ真っ赤な赤とんぼがとても綺麗だったことを今でも覚えています。</p>

(ア) 体験を通した印象深い記憶を絵に表わしたものが次に続く。(29%)

作品例 2. (ア) 体験

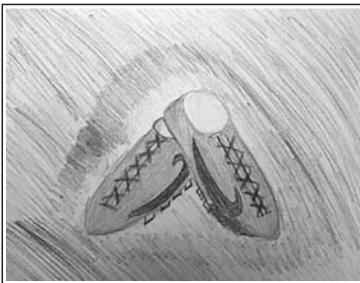
	<p>この絵は小学校3年生の時に出場したコンクールを思い出して描いたものです。控室からステージに出るまでの緊張感は今でも忘れられません。結果は1点足らずに西日本大会には出場できませんでしたが私の原点です。</p>
---	--



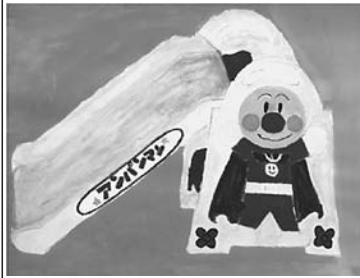
私の風景画は学校グラウンドの鉄棒です。毎日、昼休みや放課後に友達と練習していました。ずっとできなくて、鉄棒のテストの日に補助でやりましたが、先生がもうできると言って下さり、初めて補助無しで出来た時を思い出します。

(エ) 物にまつわる思い出 (16%)

作品例 3. (エ) 物



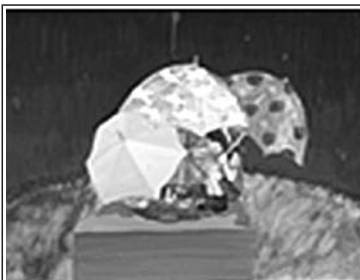
僕は小さい頃、あまり運動をするほうではなくて、それに体も強くありませんでした。そんなころ友達に強引にサッカーに誘われて入りました。そしたら楽しくて運動がとても好きになりました。その時に初めて買ったスパイクが今でも宝物なので書きました。



小さい頃、飽き性の私がわがままを言って親と「遊ばなくなったら捨てるよ」という約束で買ってもらったアンパンマンの滑り台。これが私の原風景だ。両親が共働きだったのでよくこれで遊んで帰りを待っていた。すぐに飽きたけど、捨てられるのが嫌なのでよく遊んでいるフリもしていた。

(ウ) 家族や友人との思い出 (13%)

作品例 4. (ウ) 人・ペット



原風景といえるかわかりませんが、私の心に残っている風景を描きました。小さい頃、雨の日に近所の子達と傘を持ち寄って秘密基地を作り、中でままごとをしているところです。今でも雨が降ると、ふっと思い出します。



この原風景は、小さい頃に親と妹と3人で楽しくおフロに入っているときの風景で、水面に手をあてると小さくなるということを親が私に教えてくれています。今でも水面に手をあてると、あのかのときの楽しい気持ちが思い出されます。

家族と見た風景、あるいは家族と行った旅行など、人との関わりは常について回るため（ウ）の割合は実際にはもっと高いものになると考えられる。

(2) 原風景に込められた気持ちについて

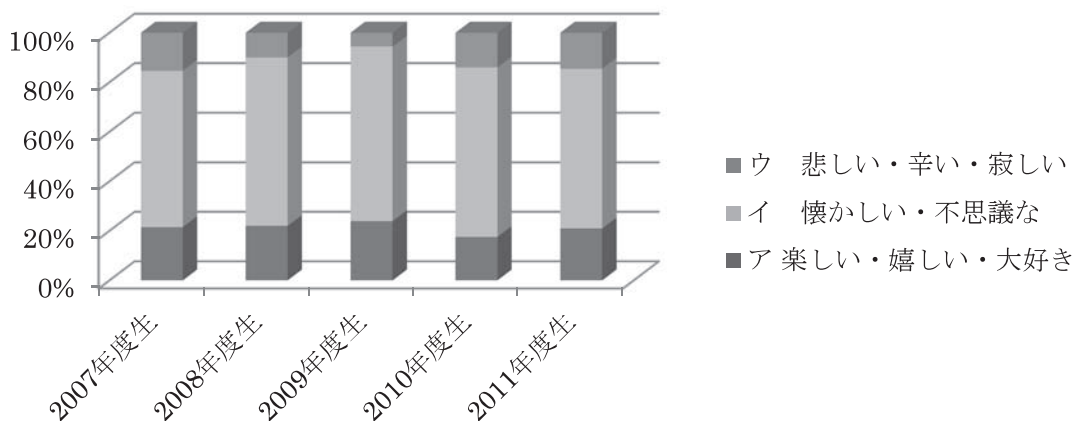
ア 楽しい・嬉しい・大好きといったプラスイメージの風景

イ 懐かしい気持ち、不思議な気持ちを感じる風景

ウ 悲しい・辛い・寂しい・嫌いといったマイナスイメージの風景

表2 原風景に込められた気持ち

	ア	イ	ウ
2007年度生 (65名)	14	41	10
2008年度生 (50名)	11	34	5
2009年度生 (71名)	17	50	4
2010年度生 (57名)	10	39	8
2011年度生 (62名)	13	40	9
合計 (305名)	65	204	36



グラフ2 気持ちによる分類の年度別割合

懐かしさを表現した原風景が圧倒的である。(67%)

作品例5. (イ) 懐かしい気持ち、不思議な気持ちを感じる風景



私は佐賀県 唐津市の唐津城から見た風景が思い浮かびました。幼い頃から、毎年春になるとお父さんが桜を見に連れてってくれた場所だからです。海もすごく綺麗で桜と同時に眺めることができました。今でも唐津城の桜は大好きです。



私の原風景は、2歳から4歳くらいまで住んでいたアパート近くの川沿いの散歩コースです。あまりその頃のことは覚えていないけれど、この風景だけはしっかり覚えています。何色ものコスモスがずっと先まで広がっていて、母と手を繋いでおしゃべりをして歩きました。幸せな気持ちだったことを思い出します。

楽しい・嬉しい・大好きだといったプラスイメージを表現した者も多い。(21%)

作品例 6. (ア) 楽しい・嬉しい・大好きだといったプラスイメージの風景



私の原風景はリビングの壁に貼ってある自分の描いた絵です。これは幼稚園の頃のもので、描いた絵をセロテープで壁に貼りつけて遊んでいました。私の絵を両親が褒めてくれたので嬉しかったのを覚えています。この原風景は私が絵を描く喜びを知った原点でもあります。



私の原風景は、幼稚園の時にお遊戯会でおやゆび姫の主演をしたときのラストシーンです。王子様と幸せに結婚していくシーンです。たくさん練習したことを今でも覚えています。衣装は、母の手作りでした。家族や、親戚も見に来てくれたことを覚えています。

悲しい・辛い・寂しい・嫌いといったマイナスイメージを原風景として捉えている者(12%)も少なからずいる。

作品例 7. (ウ) 悲しい・辛い・寂しい・嫌いといったマイナスイメージの風景



幼い頃両親共働きだった私は学校から帰っても一人のことがあった。母の帰りが待ちきれず一人家の前まで出てはじっと待っていた。あの時見た夕日は寂しさをいっそう強くさせ今でもその思いとともに私の心に残っている。



私が高校二年生の時の教室の廊下です。この廊下を含め、この時のことは思い出したくないし、二度と体験したくないようなとても嫌な思い出がいっぱいつまっています。だけど、この時の体験があったからこそ、今の自分があるんだなあと考えると、いい思い出です。

(3) 記憶の中の自分との出会い方について

子ども時代の記憶の捉え方として金田光世氏・佐野敏行氏による『記憶の中の子ども時代の自分との出会い』の中で、文化人類学者 岩田慶治氏の「日本人の原風景論」を参考に「記憶の中の自分との出会い方」との関係を分析するための、次の4つからなる枠組みを作っている。

ア 過去の鮮明な感覚を蘇生させ、再び感じる時

イ 過去の漠然とした気配を捉え、それに浸る時

ウ 記憶を連ならせ、連なりに一貫した本来の自分のテーマあるいはアイデンティティを再び感じる時

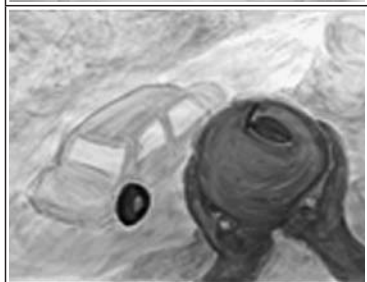
エ 今では失われたものがあることを記憶の中に感じる時

(ア) たまたま転がってきたボールを、ちょっとした遊び半分で蹴ったとする。その蹴ったという行為（経験）をきっかけに子どもの頃、友達と陽が暮れるまで遊んでいた時の情景や、その時の天候、温度感まで鮮明に蘇ってくることがある。また、衝撃的で印象深い、あの日あの時のはっきりと刻まれた記憶などもこの枠組みに入れる。

作品例 8. (ア) 過去の鮮明な感覚を蘇生させ、再び感じる時



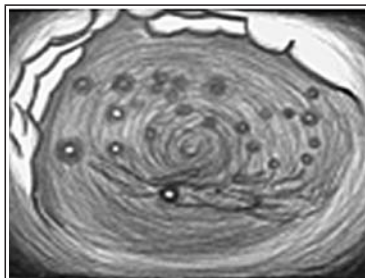
私の原風景は家の近所にある公園です。補助輪無しの自転車に父の支え無しで乗れた場所で、あの時の嬉しさは鮮明に覚えています。そして私にとってこの風景にはもう一つの思い出があります。それは私が一歳の頃にブランコから転落して頭に大怪我を負ったことです。あの一瞬の出来事がふと今でも頭に浮かびます。



私の原風景は小さい頃に父の実家に行き、そこで人の家の夏蜜柑を取ってしまい、運悪くその家の人の車が帰ってきたという原風景です。自分では悪いことをしてしまったという罪悪感と見つかってしまったという焦燥感のせいで覚えていたんだと思います。

(イ) れんげ畑やコスモス畑を目にしたたり、また、何でもない雑踏の雰囲気や匂いなどでも、その漠然とした気配から、いつかどこかで感じたその懐かしい感じに、ぼーっと浸ってしまうこともある。また、記憶の中のある風景をきっかけに思い出される、その周辺のぼんやりとした記憶などもここに含まれる。

作品例 9. (イ) 過去の漠然とした気配を捉え、それに浸る時



この絵は夜空に光り輝く星です。季節は夏、夏の大三角形の中に、天の川が流れ込んでいます。時刻は午前1時をまわり、民家の明かりも消え、街中が寝静まった、日頃とは違う、少し不思議な世界です。電気の明かりが少ないので、今まで見たことのない量の星が輝いていました。今でも夜、ふと窓から空を見上げると、このときの星空を思い出します。



私の原風景は母が妹の出産の前後に入院していた病院の廊下です。その廊下は二つに分かれており、片方の奥はよくわからず暗い記憶しか残っていません。印象的なのは、眩しいほど輝いている壁と花瓶にはいった色とりどりの花です。私はこの風景がふとした時に浮かんできます。

(ウ) 例えば、小さい頃から音楽が好きだったとして、時がたってひょんなことから楽器に触れた瞬間、もう一度真剣に音楽と向き合ってみようと行動する人がいたりする。これらは音楽と自分との関わりの記憶の連なりが自分の生き方やアイデンティティを再確認させてくれるからであろう。ある時点の思い出というような限定されたものではなく、子どもの頃から長年継続して行っていた体験などもこれに含める。

作品例 10. (ウ) 記憶を連ならせ、連なりに一貫した本来の自分のテーマあるいはアイデンティティを再び感じる時



私の原風景は小学校3年生から習っている習字です。習字でかいた「春の訪れ」という字は小さい頃私が習字で初めてとった賞でした。それから私は習字が好きになり、高校も書道部に入りました。そのきっかけになった私の絵です。



私が心に残っていることは、エレクトーンを頑張って練習したことです。幼稚園の頃だったので、なかなか弾けず苦勞もしたけど、音楽が好きだったので今まで続けることが出来ました。

(エ) やり直しのきかないもの、失くしてしまったものは誰にもあるし、時が流れれば、世代も変わり物も朽ちると同時に、新しいものがどんどん生み出されてくる。従って、人々の考え方や暮らしぶりも当然変わる。昔は良かった、あの頃に帰りたいと亡くしたものを懐かしく感じる記憶がある。

作品例 11. (エ) 今では失われたものがあることを記憶の中に感じる時



私の原風景は、おばあちゃんに行ったレンゲ畑。たんぼ一面にレンゲが咲いていて、一番大好きな風景。田植えが始まるまでの期間限定のレンゲ畑に行くのは凄く楽しくて、いつもおばあちゃんと一緒に首かざりや冠を作ってた。

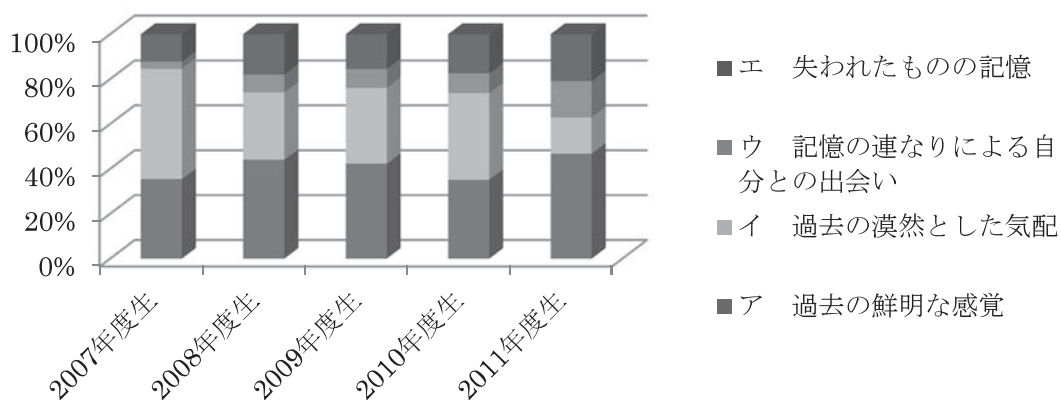


僕が描いた原風景は、田んぼとその周りです。これは恐らく、おじいちゃん家の近くで4.5才くらいの時に見た記憶です。おじいちゃんは死んでしまいもういませんが、田んぼがあるような所を見るといつもおじいちゃんを思い出してしまいます。

つまり、記憶というのは、心(脳)の片隅に隠れていて、何かに影響されてふっと現れてくるものであり、我々も普段、無意識のうちに過去の記憶の呼び覚ましを絶えず経験している。授業での記憶の呼び覚ましは、偶然、何かに触発されて蘇ったというのではなく、半ば無理やり能動的に絞り出した記憶ということになり、本当の意味で懐かしさに浸るような記憶でない場合もあるだろう。従って自分の原風景を探すためには、ある程度の時間が必要となる。それもまた、いくら時間をかけても触発される大切な何かが無ければ見つけることは難しいかもしれない。学生たちが、どこまで真剣に過去の記憶と向き合えたかは分からないし、この分類の枠組みに収まりきれないものもあることを承知で、このア～エの4つに分類してみた。

表3 記憶の中の自分との出合い方

	ア	イ	ウ	エ
2007年度生 (65名)	23	32	2	8
2008年度生 (50名)	22	15	4	9
2009年度生 (71名)	30	24	6	11
2010年度生 (57名)	20	22	5	10
2011年度生 (62名)	29	10	10	13
合計 (305名)	124	103	27	51



グラフ3 記憶の中の自分との出合い方の年度別割合

目標や進路に大きく関わるものとして描かれている原風景も少なからずあり、この分析結果を見ると「記憶を連ならせ、連なりに一貫した本来の自分のテーマあるいはアイデンティティを再び感じる時」という(ウ)の枠組みで、原風景を表現しようとする作品が年々増加していることが分かる。(グラフ3) 将来、教育者・保育者を目指す本学の学生の特徴がよく表れていると言えるかもしれない。授業の中では、学生は精一杯記憶を辿り、無理やり絞り出したものを自分の原風景としているが、本当の原風景はもっと歳を重ね、いろいろな経験をしたうえで或る時、突然見えてくるものなのかもしれない。ここでは、単なる懐かしい記憶の断片だけが表現されていたとしても、忘れかけていた昔の懐かしい記憶を手繰り寄せる貴重な時間になったのではないだろうか。

3. 子ども基礎演習 課題Ⅱ「自画像」

1) 自画像について

この授業では、「自己の再確認」を大きな目的としており、美術的表現を通して客観的に自分を知るもう一つの方法として、「自画像」を描かせている。

人は物心がついてから自分の顔を一度も見ないという日は、ほとんどないのではないだろうか。朝の洗顔など毎日自分の顔を見続けているだろうし、女性であれば何十分も化粧に時間をかける人もいるだろう。また、幼いころからたくさんの写真やビデオ映像など、客観的に自分の姿を見

る機会も多いはずである。それなのに、案外分かっていないのが自分の顔かもしれない。目の形は、鼻の形は、口の形はいったいどうであろうか。鏡を見ずに頭の中で思い出そうとしても細かいところは、なかなか思いだせないものである。ましてや、悲しい時の表情はいったいどんなものか、怒った時の顔はいったいどんな表情をしているのか。そして、人にはどのように見られているのか。普段から見慣れているはずの自分の顔をもう一度しっかり観察することにより、自分自身を客観的に再認識してみようという試みがこの演習の課題である。

近代の画家が「自画像」という絵画の一つのジャンルを確立しており、我々もそれを知っている。レンブラント、ゴッホ、ゴッディンなど西洋の著名な作家の自画像や日本でも古くは青木繁や岸田劉生など、美術の教科書に登場してくるものもたくさんある。「私の原風景」でも述べたように、学生たちにとって自画像は、表現としてとてもハードルの高いものと感じるはずである。おそらく、似ていなかったら自画像にならないのではという固定観念がある。ここでは、写実的な表現による自画像を完成させることが目的ではない。自分を観察し、見つめ直すことに意味がある。写実的な表現の技術を持たない者がそれを達成するために、それを克服する手段として様式化を図ることが重要となる。つまり、あるルールを決めて、その中で表現していく方法をとるのである。そうすることにより、上手い、下手という感覚に縛られることなく制作が可能となる。ここでは、円の中に対極にある二つの表情を、正中線を境に色面構成として描くように決めている。

2) 授業の展開とプロセス

写実表現で難しいのは、まず、形を正確に描くこと。そして立体感を出すために陰影や濃淡・タッチなどを活かすことが必要となるが、それが難しい。そこで顔の形を真円と決め、分割された色面はタッチや濃淡をつけないベタ塗とする。丁寧に塗りの作業をこなしていけば誰もが様式化されたスタイルで、自画像を完成させることが可能になる。

学生には、制作の手順を以下のように示したプリントを配布し演習に入る。

- ② まず、自分の顔をしっかりと鏡で観察する。
- ③ スケッチブックに鉛筆で顔をデッサンする。(可能な限り写実的に)
- ④ 違った表情を二つ選び、パーツ(目・鼻・口など)の表情の違いを観察しデッサンする。
- ⑤ 携帯電話のカメラ機能を利用し横顔を撮影する。それを基に横顔の特徴を観察する。
- ⑥ 直径30cmの円をスケッチブック(横位置中央)に描き、正中線で分割する。
- ⑦ 二種類の表情(対極にあるもの)を左右に分割された部分に色面として構成しエスキースに従い下描きする。
- ⑧ 水彩絵の具(ポスターカラー等)を使用し、着色する。

人間の顔を表現する場合、額や鼻の、高さや形を表そうとする場合、正面よりも横顔の方が描きやすい。アウトラインのない鼻を正面から描くことは一般の人にとってとても難しい作業である。

エジプト文明の遺跡などで有名なレリーフの壁画を例に挙げると、特に芸術家でもない一般の市民や奴隷が何千年にも渡り、同じスタイルで描き造り続けていくためには、この様式化された表現手段がどうしても必要であった。それ故、ここでは一切正面向きの絵は存在しない。逆に、

目に関しては横からの表現が難しいため、全て正面向きで表現されている。描きにくいものや表現しにくいものは極力避けて通るというのが、専門家でもない集団が長い年月をかけて制作を継続していくための方策であった。

この授業の課題においても同じように、円の中心を貫く正中線は横顔のシルエットラインとし、左右に分割された目あるいは口に関しては正面向きで表現するようにルールとして決めた。これらの各パーツの形は事前に観察したものをシンプルに図案化して描いていく。ここで大切なのは、それぞれの特徴をやや強調し、色面として描くことである。特徴をうまく捉えようとするれば、結果的にしっかりとした観察が必要になる。

左右の表情に関しては、「楽しい顔と悲しい顔」「怒った顔と笑った顔」「真面目な顔とふざけた顔」など対極にある感情の表情で描くこととしている。色彩も見えるままの表面の色を選ぶ必要はない。むしろ、それぞれの表情に最もふさわしい色彩を選んで配色することが重要である。例えば、楽しい顔や笑った顔の場合は、暖色系の色相で明るく鮮やかな色彩を、悲しい顔の場合は、暗く彩度の低い寒色系や無彩色を選択するとそれだけでその感情の効果を高めてくれる。赤い肌であっても青い肌であっても全く関係がなく、感情を表現するための配色計画を立て、それに沿って色をつけていけばよい。この時点で学生達は色彩の理論や、色の持つ感情的効果などを学んでいる訳ではないので、十分な色彩計画に基づいた作品とは言えないかもしれないが、彼らなりの長年の経験から、それにふさわしい色を感覚的に見つけ出して表現しているようである。

自画像作品例



この様式化された「自画像」の制作を通じて、自分の顔がいったいどんなもので、様々な感情によって自分の顔がどのように変化するかを確認することができる。感情によって自然に出てしまう表情ではあるが、その顔が人にとって不快なものになってはいないか、どんな表情が温かさを伝えるのかなど、文字通り、自分を見つめ直すきっかけになってくれればと願っている。作例としていくつか取り上げてみたが、5年間で305名の写真データを一同に集めて眺めると実に壮観であり、その絵から学生一人ひとりの姿を思い浮かべることができる。これらの作品は、自分を再確認する手段として制作されたものであるが、それぞれに個性的でユニークなものであり一つの立派な作品に仕上がっている。

最後の授業で締めくくりとして書いてもらっている「私の原風景」「自画像」を含めたこの授業に対する感想を、ここにいくつか紹介する。(原文)

授業に対する感想

- ① 自分の子供時代を振り返る中で、改めて気付く気持ちや感情を思い出したり、無意識に残っている心を発見したりなど、まだ19歳で生きてきた年数は多くないですが、幼い頃の体験が現在の私を作り上げているのだということを実感できたように思います。今回、二つの制作を通して、幼児期の自分を見つめ、現在存在している自分自身を見つめ直し、様々なことを考え、発見することができました。過去の自分、現在の自分を大切にし、そして、未来の自分につなげていきたいと思います。そして、子どもと関わる上で、子どもを理解し、何かを共感できる教育者になれるように、幼い頃の気持ちや、今の気持ちを大事に心の中にしまっ、時には思い出すようにしたいと思います。
- ② この授業を通して、自分が子どもだった頃のことを思い出すことができた。「原風景」を描くことで、自分を改めて振り返ることができ、見つめ直す機会になった。何が好きで、どこでどんなことをしていたか、自分にも幼い頃がありとても楽しいものだったんだということがわかった。この原風景を大切にしながら壁にぶつかった時や、悩んだ時に思い出すことができたらと思う。
- ③ 自分を振り返ることで、子どもの頃の気持ちを考えたり、実習などで子どもを理解するときにも、自分の子供の頃の記憶がとても大切になると思いました。

大半の学生たちにとって、この授業が、自分を見つめ直すとても良い機会だったと感じているようである。また、自分のことはもちろん、自分を育ててくれた故郷や家族の温かさ、愛情なども同時に再認識できたという感想も多かった。また、二つの課題は、絵を描くという作業に時間を費やしたわけであるが、「苦手だった絵画が少し好きになった、楽しさが少しわかったような気がする」などの感想も聞かれた。

4. おわりに

開学以来、入学してきた全ての学生に課した課題をまとめ、この課題の持つ意義を再確認することができた。「己を知る方法」(自己の再確認)はいろいろなやり方が考えられるとは思いますが、美術の嫌いな、そして苦手としている学生が多い中、美術表現の持つ力の一端を僅かでも感じてもらったのではないかと思う。これをきっかけに、美術に興味関心を持ってくれる者が一人でも多く出てくることを期待したいし、この「子ども基礎演習」の授業を担当する限り、今まで同様に継続していきたいと考えている。

参考文献

- (1) 金田光世・佐野敏行著『記憶の中の子供時代の自分との出会い—内なる同行者との諸関係—』奈良女子大学学術情報リポジトリ、2010年、P.106